

もうすぐ八月のお盆です。準備を始めている方もいらっしゃるでしょう。今朝は、ある地域のお盆の習慣についてご紹介します。

海岸沿いに位置するこの地域では、お盆を迎える日の朝、なだらかな曲線を描く砂浜に行き、寄せては返す波に洗われた砂を持ち帰ってくるのだそうです。その量はおよそ両手で掬って二山から三山ほど。この砂を使って自宅の玄関先に「スナモリ」と呼ばれる台形状の舞台を作り、ナスの牛やキュウリの馬をその砂の舞台にお供えし、生花や紙で作った蓮の花をその両脇に飾ります。

お盆の時期にその地域を歩くと、多くの家庭で「スナモリ」を見ることができますが、その大きさや飾り付けにはそれぞれの家庭で違いがあり、なんとも興味深いお盆の風景になっています。

この「スナモリ」に込められた意味にはいくつかの言い伝えがあるようです。代表的なものは、自宅に帰ってきたご先祖様が「スナモリ」を目印に自宅にお入りになるという言い伝えです。

そしてもう一つは、ご先祖様が、お亡くなりになっても続けている善い行いと関わっています。

お盆は、墓地までご先祖様をお迎えに行き、さらに自宅に着いたら迎え火を焚いて目印にするなど、ご先祖様が子供たちの待つ家に帰ってくると言われる仏教行事です。けれども、ご先祖様以外の、いわゆる「無縁さま」は、どこに帰れば良いのでしょうか。実は私たちのご先祖様は、そのような無縁さまを子供たちが住む自宅にお招きし、お盆のお供え物のお裾分けをしようとなさるのだそうです。ところが、招かれた無縁さまは遠慮をして、玄関先までしかお見えになりません。そこでご先祖様は、せめて「スナモリ」にお供えされたものだけでもどうぞとお勧めになり、そこで無縁さまは供養を受けられ喜ばれるのだそうです。

私たちは、思いが至らなければ、いつの間にか自分優先で自分さえよければという考えや行動をとってしまっているかもしれません。

お盆を迎える今、この「スナモリ」に込められたご先祖様のおもてなしの心に想いを馳せてみませんか。

そして私たち自身も、この世の中のありとあらゆる生命に対して、優しい気持ち振り向けてみることで、それもお盆の大切な習慣ではないでしょうか。